大会参加
レポート

2nd World Deaf Orienteering Championships

July 25-30, 2011
Cherkasy, Ukraine

日本デフオリエンテーリング協会　選手兼コーチ 野中好夫

聴覚障がい者向けWOCに日本から3人参加！

WDOCとは

WDOCとは4年に1回開かれる、聴覚障がい者のオリンピックであるデフリンピックの合間に1回開催される聴覚障がい者向けの世界オリエンテーリング選手権大会。第一回は2006年8月14日～19日にハンガリーで開催され、当時はまだ日本に聴障オリエンティアが私の家内以外にはいなかったので中欧へのハネムーンを兼ねて参加。まだアジアからは日本のみしかなく、成績はいつも最下位。しかし、2009年台北で行われたデフリンピックで台湾選手がスプリントでいきなりメダル獲得するほどアジア地域のライバルが出現してきた。

第二回の今回は昨年の多摩OL主催のJC大会よりデビューした聴障登山家の田村聡（多摩OL）、今年のKOLA新春大会よりデビューした丘村彰敏（大阪OLC）の有力デフオリエンティアたちが誕生し、このWDOCへの参加を目標にそれぞれトレーニングを積み重ねてきた。とくに田村聡はJOAの強化委員会の強化プログラムへ2回の参加協力を頂いてきた。長距離走を得意とする丘村彰敏もロゲイン参加を中心にしながら走力を鍛えてきた。これらのメンバーに老兵の野中好夫（多摩OL）を加えアジア地域でナンバーワンを維持すべく世界の大舞台へ繰り出した。

第2回WDOC大会の概要

開催期間：2011年7月25日～30日
開催場所：ウクライナ チェルカースィ市
参加国:14カ国
80人のアスリート、30人のコーチ等
主管:ウクライナ デフ スポーツ 委員会
イベントコントローラ:
Marek Mackiewicz ICSD Orienteeering Technical Director
Victor Kirianov Ukrainian IOF event Advisor

開会式の日本選手団。左から丘村彰敏、地元の青年を挟んで野中好夫、田村聡。

開会式（7月25日）

日中のロング、リレーのモデルイベントが終わった後の夕方、16時からドニエプル川岸のRose Valleyという公園で開会式が行われた。1000人収容できるようになっているが実際には300人と観客が少なかった。式典終了後、日本を愛する地元民たちに写真攻めに追われた。ウクライナは有名な横綱大鵬の親や原発関係などで親日家が多いのではないだろうかと思った。8つものメディアが来ていて、インタビューは国際手話通訳者を介して受けた。やはり津波のことを聞かれた。日本は今、再建に向けて頑張っている。経済はどうかとも聞かれ、日本が団結して経済向上に向けて頑張っていると答えた。やはり「ガンバレ！日本！」と世界が注目している。

テレインの様子

スプリント（7月26日）

Map：”Peremoga Park”
Scale: 1/5,000
Contour Interval: 2.5m
3.3km　コントロール数22
SIチェック方式
2分間隔スタート
2MAP方式

公園の中には井戸、遊具、ベンチが

あり、MAP 上に注記がしてあった。但し、ベンチは ISSOM 規定外であった。優勝設定時間の 13 分を超えてリトアニアのトーマス・クズミンスキ選手 JOA ニュース 2011.7 号 8 ページ参照）が 16 分 31 秒で優勝した。平坦とした公園内をフルスピードで走り回るので早い地図読み技術が必要。まだ、地図読みの経験が少ない二人には走力があってもスピード不足やルートチョイスミスが目立った。とくに先行した丘村選手に追いついた田村選手が MAP 交換直後にいきなり最終コントロールに出現！あれ～とびっくりした。その後しばらく落ちつくまでに時間を浪費してしまったのが痛かった。なぜ、MAP 交換後に最終コントロールに出てしまったかは後述する当大会のサイトに掲載してある O-MAP を見ればわかると思う。

実は、私も MAP 交換直後、最終コントロールへ向おうとしたがコントロール順番が違うことにすぐに気付いたのでたいしたことにはならなくて済んだ。こんなミスを誘うようなコース設定は面白かった。そのほかにも上手に地図読みするほど無駄なルートチョイスがなくなるようにしかけがされているのも面白い。海外競技経験のある私は初めてオーストリア 2 選手をギリギリ抑え、欧州勢の上に順位が上がれたことが嬉しかった。

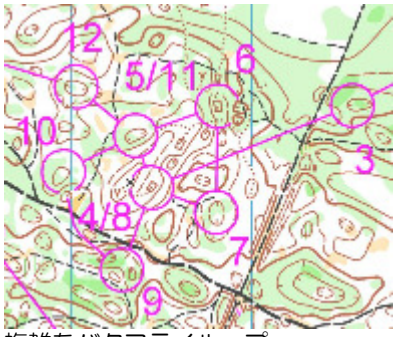
【成績】
33 人完走中 27 野中、31 田村、33 丘村
台湾は 22、24、32 で完走

スプリント・フィニッシュする田村（左）

ミドル（7 月 27 日）

Map：”Heronymivka”
Scale: 1/10,000
Contour Interval: 2.5m
5.5km 登り 60m コントロール数 21
SI チェック方式
2 分間隔スタート

平坦な森林地でかなりの凹地があった。後に聞くところ戦争で出来た凹地と穴だそうだ。17 コントロール位置説明は凹地だった。MAP を見て恐怖感を覚えた。何しろ、WOC 同様に設定した IOF 制限時間が 70 分と短い。これでは、私だけでなく日本全員が失格になるのではと、スタート直後に感じた。森林内は走りにくい個所も多く直進しにくく高度なテクニックを要するコースであった。途中に 2 バージョンのバタフライが組み込まれ選手間の競争性を高めていた。



複雑なバタフライループ

長年間経験していてもあまりバタフライを経験してない私はぐるぐる回りすぎて方角が分からなくなり同時にコントロール順番も忘れてしまった。記憶に残っていたダブりの無いコントロールへ戻ってやり直そうと思ったがもう制限時間にあと 10 分となってしまい、棄権宣言した。スピード読図などに慣れていたがバタフライでパニックになってしまう自分の欠点があらためて出た感じであった。国内大会でも是非、バタフライを積極的に取り入れて欲しいと思った。しかし、高年齢クラスには避けるべきだろう。いや、頭のトレーニングになるからよろしいかなとも考えてしまう。でも、面白かった。

一方、他の二人はこのバタフライ区間以外は危険な直進を避けて分かりやすいアプローチから攻めっていったようでそれはよかったが次回はさらにテクニックを磨きガンガン攻めっていって欲しいと思う。田村選手は制限時間を超過しても 30 分以内でゴール出来ると判断して完走してきたのはよかった。まだオリエンテーリング経験が 1 年も経っていない丘村選手は途中で棄権して無事、帰還出来てホッとした。もうバス輸送は終わってしまったあとだったのでスタッフの車に乗せて頂いた。

何故か、私以外の二人が蚊の大群に襲われ背中に一杯のぶつぶつが出来ていた。顔、手の甲が腫れていた。慌てて、アジア担当のボランティアと一緒に薬屋へ駆け込み、虫除けと軟膏を手に入れた。日本から持参した虫除けは効かない。海外へ行く前に予防接種をうっておくべきだったかなとも考えるようになったが、私の今までの海外遠征経験からこんなに蚊に刺されたことはなかったのでウクライナは特別に蚊に刺されやすいのかと思った。確かにあちこちで見られた積雪溶けの池や川は綺麗ではなかった。

田村選手は競技中に直径 10 センチくらいの丸太橋を無事に渡れたのは綱わたりをスポーツのように楽しむ「スラックライン」を時々自宅近くの公園でやっていた効果があったのではないか。「スラックライン」に興味のある方は是非、田村選手にどこの大会でも声をかけてください。車に積んでいたらすぐに設定してくれるだろう。

このミドルも優勝設定時間の 32-35 分を超えてまたリトアニアのトーマス・クズミンスキ選手が 36 分 00 秒で優勝した。2 位ウクライナ選手との差 3 分。

【成績】
29 人完走中 27 田村（制限時間を約 20 分オーバー）、DSQ 野中・丘村
台湾は全員 DSQ

休養日（7 月 28 日）

大会本部が用意してくれた 100 キロ先にあるウクライナの昔の民族生活様子が分かる民族村のような観光地の往復ツアーと地元の社会福祉団体の招待でウクライナの伝統踊りなどを観た。本当にウクライナは旧ソ連の雰囲気が残っており、広い畑にひまわりがびっしりとたっていた光景は綺麗だった。

ロング（7 月 29 日）

Map：”Moshny”
Scale: 1/15,000
Contour Interval: 5m
10.0km 登り 330m コントロール数 23
SI チェック方式
2 分間隔スタート

丘陵のある森林地で、ミドルのときよりも蚊大群の攻撃がすごかった。スタート待機中に焚火を起こしていたチームがあったほどであった。出場せずコーチに専念した私は暑くてもウインドブレーカを着用。田村、丘村選手は首にタオルで巻いて待機。ホントに蚊にはマイッタ！

今回のスタート地区枠は変則であった。普通、3 分前枠があるのに対し、7 分前、2 分前、1 分前という枠。つまり、7 分前に入ったら、1 分後には 400 メートル先の 2 分前枠まで行かなければならない。しかも 2 分前枠は小道のカー

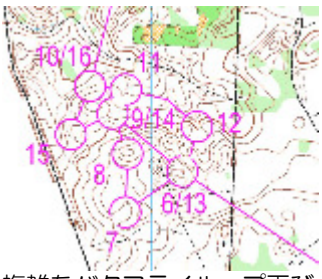
ブ先なので見えない。遅刻しないように軽く走って行っていた。なぜ、こういう変則スタート枠を作ったのかは分からないが、おそらく翌日のリレーのためであろう。7 分前枠のあるスタート待機所より少し進むと右側にリレーのコントロールがいくつも設定されるところであったことがリレー後にわかった。

スタート 7 分前の丘村

コースはミドル程テクニックを要するほどではないが、長距離走の得意な田村、丘村選手にとっては好都合かもしれない。しかも制限時間も 4 時間と長い。デフリンピックでロング経験した私は歳のせいかロングレースで頑張ってもタイムの短縮が見込めないために出場しなかった。その反面、他の二人はやる気満々で体調を整えていた。ライバルの台湾に勝てる期待もあった。

2 選手を見送ったあと、ゴール地点へスタッフの誘導で移動。この大会では全てスタート待機所からゴールへ行くにはスタッフの誘導が必要で単独移動は禁止されていた。ゴール周辺情報が選手に伝わらないようにするためかもしれない。確かにゴールより離れたところに給水所があり、マラソン同様に特定選手専用のボトルを置くことも可能であった。前日の監督会議で知った我々は各自のボトルを用意しコーチの私に託した。

我が日本チームは私が不在の為かスタート順が繰り上がり早いスタートとなった。その甲斐あって田村選手は追い越されたトーマス選手の後を追いかけるように走れたことが出来、彼のスピードとパワーに驚嘆したようだ。確かに WOC の予選を突破した方なので日本の一般ナショナルチームメンバより早いのではないかと思ったりしてしまった。ごめんなさい。同時に WDOC のレベルも相当高いものだと思った。是非、JOA の協力で誘致させ、一般との交流レースを併設したいものである。ロングもコース終盤に 4 バージョンのバタフライが組み込まれていた。



複雑なバタフライループ再び

今大会のバタフライは通行困難が全くない複雑な高低のあるところに設定されていた。無事、全員の制限時間内ゴールが確認されたときはホッとした。特に経験の浅い丘村選手はよく頑張ってくれた。田村選手とともにこれからはさらなる進歩をしてゆくだろうと確信した。ロングも優勝設定時間の 70 分以内でリトアニアのトーマス・クズミンスキ選手が 62 分 16 秒で優勝した。3 冠王！2 位ウクライナ選手との差 7 分。

【成績】
30 人完走中 25 田村、30 丘村
台湾は一人のみ 22 で完走し、他 2 人は DSQ

リレー（7 月 30 日）

Map：” Moshny”
Scale: 1/10,000
Contour Interval: 5m
1 走 6.7km　2 走 5.5km　3 走 4.8km
登り 155m
コントロール数
1 走 15　2 走 13　3 走 11
SI チェック方式
マススタート

リレーは日本からは今回が初めての出場であった。ロングと同じテラインでスタートもゴールもロングのゴールと同じであった。ゴールは日当たりのよい雑草地の真ん中にあるせいか蚊の心配がなかった。しかし、レース中に森林の中に入るとやっぱり刺される！刺されないように常に精一杯走りまわることで立ち止まれない。まだ技術的に十分でない丘村選手は前日のロングではコンパスワークや地図読みが落ちついて出来なかっただろうと想像した。確かに逆の方向へ進むという単純なミスもあったようだ。

リレーは ForkingSystem をとっており、jog1～3 のコースが用意されていた。1 走から 3 走までだんだん距離が短くなり盛り上がりを高めていた。基本的には全て同じコースだが途中で分岐され長い距離順に遠回りして戻るように組み込まれていた。10 時 10 分スタートから制限時間の 4 時間の 14 時 10 分までにゴールすればよいが、帰りのフライト都合で 13 時 30 分に会場を後にしなくてはならなかった。このため、1 走の田村選手からタッチを受けて 2 走の私がゴールした時点で13時を過ぎていた為、スタッフの勧めもあって競技を棄権した。私がゴールした後に 1 走の田村選手からいきなり第 1 コントロール不通過で既に失格と言われガクンとした。でも、それを知らないままに努めて完走できたのはよかったかもしれない。でも失格となった田村選手は今でも何故、ちゃんと SI チェックしたのにと納得できていないようであった。EMIT カードのようにバックアップラベルシステムが無いのでどうしようもなかった。でも田村選手は未だにすっきりしていない。それで、過去、日本でもエリート選手がこの SI チェックで失格になったことで色々物議をかもしたことがあるから後で彼らに伺ってみてはと話してなだめた。SI チェックはランプが点くまで押し続けるものだろうかと今でも分からないのでいつかユニットを借りて SI チェック練習をしてみたい。

リレーでは、男女ともに優勝ロシア、2 位ウクライナ、3 位リトアニアであった。これらの国で共通するところではこのオリエンテーリングのプロ選手であることであり、毎日、トレーニングしながら給与をもらって生活している。勝つとボーナスが出るようです。一部では引退しても年金でもらえるので心配はないと聞かされたがその真偽は今でも不明。羨ましい限りだと思った。

ウクライナでは国内各地から集められた 80 人の強化オリエンティアがおり国家スポーツプログラムで養成している。共産国だからこういうのが出来るのだろうかなと色々と考えてしまう。聴障者だからスポーツだけ頑張ればいいということかなとも思ってしまう。どなたか知っていたらご教授頂きたい。

【成績】
日本チーム　DSQ（2 走のみ完走（区間 11 位）して競技放棄）
台湾チーム　DSQ（1 走が 5 コントロール不通過で 2 時間 22 分ゴールし競技放棄）

リレー・フィニッシュ目前の野中

参加各国に贈呈された記念メダル

運営について

このWDOCもデフリンピックのオリエンテーリング競技テクニカルディレクターのMarek Mackiewiczさんが中心となり、ウクライナの有力デフオリエンティアと協力して大会全体を動かしていた。その一方、コース設定などは現地ウクライナチェルカースィ市の一般オリエンテーリング委員会メンバーがやっていた。運営主体は聴覚障がい者団体が中心でスタッフは、他のデフスポーツメンバーがボランティアとして参加されていた。

ウクライナのデフオリエンティアの団結力は大きく行政まで動かしている。ウクライナではオリエンテーリングが国内の有力スポーツ種目の一つとしてとらえている為であろう。開会式等のニュースが8つのメディアによって国内に放映された。しかし、一般の観客は少なく、ゴールにはデフの観客がみられ、日本選手と一緒に写真を撮りたがっていた。日本は人気がある東洋人なんだと思うと同時に今後はもっと養成して成績をよくしていかなくてはならないと決心した。

ドーピングの方もちゃんと行われており、ウクライナのみでは正式判定出来ない為、モスクワの研究所まで輸送して行われている。全てのテラインは宿泊ホテルから輸送バスで15分から40分までのところにあって便利なところであった。しかし、チェルカースィ市はキエフという首都から200キロ位のところにあり、往復一般道を時速120kmで送迎して頂いた。トヨタ、日産、三菱など多くの日本製乗用車が一般道をフルスピードで飛ばし、しかも対向車線に出て追い越すタイミングもスリルがあった。やはり、蚊のこと、怖い車、あまり美味しくない食事、綺麗じゃないホテル（確かにIOFアドバイザーのレポートに国際的標準の宿泊施設ではなかったと載っていた）、旧ソ連の環境もあり、あまりまた行きたいとは思わない。それなのに面白いオリエンテーリングコースやMAPがあることが残念である。

全ての競技のスタート方法はやはり、スタート係が手で5、4、3、2、1、GO！と指サインしていた。デジタル表示は3分前スタート枠（ロングのみ7分前）にかけており、現時点タイムをデジタル表示しながらその下のデジタルテロップでゼッケンNOと英文氏名が流れていた。これはコールの表示でありとても便利であった。今回のWDOCはIOFのWOC規定に則って行われたが、O-MAPはカラーレーザープリント、ベンチのシンボル表示という2つの逸脱を承認したとIOFアドバイザーのレポートにあった。

民族衣装姿のスタッフたち

（野中好夫）
（レイアウト・藤島由宇）